喜入は六つ～それぞれの物語を有する地域の集まり～

鹿児島湾に面し、南北に長く伸びた海岸線に沿った領域を有する喜入は、南薩地域の交通の要となる地域だけに、中世より和泉氏、伊集院氏、蒲生氏、喜入氏、肝付氏と時代ごとに領主の変遷を繰り返してきました。また、明治 29(1896)年まで給黎郡として発展し、その後は旧頴娃町ともに揖宿郡になりました。そのため、現在でも指宿市や南九州市と経済・文化的な交流が濃厚な地域です。また、一番北に位置する瀬々串地区と一番南に位置する生見地区、さらに海岸部ではない一倉地区といったように、同じ喜入でも地理的条件によって環境が異なります。つまり喜入の文化財の魅力は、地区ごとに多様であることです。

1. 喜入瀬々串町　鹿児島城下から指宿への街道の入口の町

江戸期、鹿児島城下から指宿・山川方面へ向かう際の入口であった瀬々串地区は、鹿児島城下と指宿との中間に位置し、番所や茶屋が置かれていました。また桜島を近くに望め、対岸の大隅半島の山並みと鹿児島湾を合わせた風景も地域資源です。

①宮崎神社（茶屋跡）

御祭神と創建年代は不明ですが、地区の鎮守神として信仰されてきました。宮崎大明神とも呼ばれ、現在の境内がある場所に街道の茶屋があったとされます。また、昭和 20 年代まで酪農が盛んだった頃には、乳牛が集合していました。

②番所跡

不明な点が多いですが、街道沿いとなる瀬々串には通行人を取り締まるための番所があったとされています。昭和 8 (1933)年にこの地の土手が壊れた際に、ここから仏像一体と食器日用品が発掘されました。

③瀬々串浦

瀬々串の海岸は岩浜があり、小さな入り江を形成しています。そのため、小さな船が寄港する場所でもありました。また平家物語に「木入津」とあるのは瀬々串浦ではないかとされています。

④瀬々串のそば

宮崎神社の豊祭ことほぜ祭は 12 月 10 日とされていました。この日には各家庭で手打ちそばをつくる習慣があり、来客をもてなしていました。出汁はあご出汁を使用し

ます。

2. 喜入中名町　喜入の産業を時代を超えて支えてきた町は眺望も秀逸

現在、麓と呼ばれる喜入の中心的な地域は喜入町となっていますが、「中」という地名から分かるように中名地区に属していました。そのため、中名地区は、喜入全体の政治・経済・産業の中心的役割を担ってきました。

また、地区は山間部にも広がっており、海と山の両方に産業の物語が伝わっています。海においては砂鉄の採掘、山では金の採掘が盛んでした。戦後これらの産業は衰退しましたが、喜入の発展の象徴でもあった喜入石油備蓄基地が構築され、喜入のシンボル的存在になっています。また、国道 226 号から 1 つ山手に旧道が走り、その沿線には喜入郷の領主であった肝付氏ゆかりの史跡が点在し、昔と今の両方の風景に触れることができます。

①中名鉱山跡

中名駅から山間部に入ること約 1 km の場所にあります。明治 34(1901)年に試掘申請が行われました。大正 7 (1918)年に良質の鉱脈が発見され、大正 11(1922)年に本格的に採掘が始まりました。山裾に精錬所が設けられ、昭和 11(1936)年から岩崎産業が採掘を行い、昭和 31(1956)年に閉山しました。現在は坑口の一部が残っています。

②砂鉄採掘

喜入の海岸では良質の砂鉄が採取できることで有名でした。太平洋戦争の初め頃には、日本鉱業が採掘を行い、戦後は他の企業が事業を継承して、八幡製鉄所などに送られていました。昭和 40 年代の前半までは砂鉄採取も盛んでしたが、石油基地の誕生によって事業は中止となりました。

中名の海岸

③喜入石油基地のある風景

昭和 41(1966)年から昭和 44(1969)年までの工期で完成しました。原油備蓄能力の増強と原油輸送の合理化を図るために建設されました。10 万 t タンクが 30 基、15 万 t タンクが 24 基あり、世界最大級の基地です。巨大なタンクが喜入の風景の 1 つになっています。

喜入石油基地

④櫨（はぜ）馬場

中名上公民館周辺の旧街道沿いには、ろうそくの原料となるハゼが植えられていました。これは、元禄 11（1698）年から藩の殖産興業政策の 1 つとして植えられてきたものです。街道沿いに限らず、山間部にも植えられ、ハゼの実の採取には取り締まりの役人もいて、厳格に行われていました。

櫨馬場

⑤献穀田（棚田のある風景）

平坦地の少ない中名地区では、山間部からの水を利用して斜面地に棚田が広がっています。わずかな土地に田んぼが連続する姿は、美しさを感じさせます。その田んぼの 1 つに皇室に米を献上したとされる田があり、献穀田と言われています。

献穀田

⑥青のり

海岸線の長い喜入は、冬の時期になると青のりの収穫が盛んになります。

⑦長野館跡

中名小学校から少し山手の鹿児島湾などの眺望が楽しめる場所に、領主である肝付家の別荘がありました。現在、その場所には案内を示す木柱があるのみですが、宝暦 10（1760）年、5 代当主肝付久兼の時に完成しました。

長野館跡

⑧十五夜行事

旧暦 8 月 15 日に綱引きや相撲大会が開催されます。現在は集落で綱引きを行っていますが、かつては他の集落に遠征して対抗していたといいます。綱引きは竜神を送る行事ともされています。

⑨六月灯の灯篭

「回り灯篭」と呼ばれる意匠を施した灯篭が六月灯に奉納されていました。半世紀ほど途絶えていましたが、平成 26(2014)年に復活しています。地元の古老によって特に「耳」と呼ばれる飾りを教わりながらの復活でした。

⑩枕崎弁のルーツ

中世まで喜入は喜入氏が統治している時期が長くありました。その後、太閤検地以後に領地替えがあって、喜入氏は鹿籠（枕崎）を治めることになり、家臣団とともに移住しました。その枕崎の地に広まったのは、元々は中名を中心とした喜入の言葉とされ、現在の独特のイントネーションを有する枕崎弁のルーツではないかとされています。単語や発音など共通する点も多く、今後の調査が期待されます。

⑪ドンジ節

家を建てる際に、地搗き歌として歌われるのがドンジ節です。現在は地搗きが簡略化されて歌い手もいなくなりましたが、歌だけは伝わっています。ドンジ節は中名と淵田集落に伝わっています。

3.喜入町　喜入の中心～領主の思いが反映される地域～

かつては中名村の一部でした。旧給黎城周辺に発達した旧麓、さらに現在の喜入小学校の位置に江戸初期に移転してきた領主仮屋を中心に麓が整備され、近世以降の喜入の基盤となる地区です。武家屋敷の隣接地には町人町も発展し、「旧市」や「町」という地名がそのことを伝えてくれます。また旧麓周辺の八幡川沿いには平野が広がり、新田開発も様々な時代において行われてきました。人口も密集する地区だけに、食や信仰に由来する文化財が数多く伝えられています。

①喜入麓（喜入小学校周辺）

承応２（1653）年に、現在の喜入小学校のある場所に喜入郷領主の肝付家の領主仮屋が移転してきました。それにあわせて周辺に家臣団の家が立ち並び、麓が形成されました。背後には琵琶山と呼ばれる台地が広がり、仮屋の前には「麓ん馬場」と呼ばれる通りがあります。また、武家門を有する屋敷も点在しており、この地が武士の居住地域であったことを伝えてくれます。

②旧麓（景観形成重点地区）

背後に給黎城という戦国期までの地域の拠点となる城があります。その麓に江戸初期には領主仮屋もありましたが、承応２（1653）年に移転し、行政機能の中心ではなくなりました。それでも肝付家の家臣団の屋敷は少し残り、また肝付家の菩提寺と墓所もこの地域にあることから、旧麓として大

喜入旧麓のまちなみ

切にされてきました。令和元年、日本遺産に認定された「薩摩の武士が生きた町～武家屋敷群「麓」を歩く～」の構成文化財でもあります。

③旧市・町

旧市と書いて「もとまち」と読みます。かつての海岸沿いにあたる地域で、町人たちが居住する地域でした。この地から幕末期の勤王の志士として知られる伊牟田尚平が誕生しました。町は現在、善行寺の門前にあたる地域で、かつての船付き場のある地域でした。店舗は残っていませんが、通りには商売繁盛の恵比寿神が祭られています。

④宮坂神社

祭神は不詳とされていますが、現在は天照皇大神を主祭神として信仰されています。創建は弘治３（1557）年に喜入を治めていた喜入季久（すえひさ）によるとされていますが、神社にはそれ以前の文明５（1473）年の銘が入った鰐口が伝っています。

宮坂神社

⑤南方神社

かつての給黎城の南側に位置しています。御祭神は建（たけ）御名方神（みなかたのかみ）と八坂刀売命（やさかとめのみこと）で、文明５（1473）年にこの地を治めていた蒲生氏によって建立されています。蒲生氏がこの地を離れた後には喜入氏、さらには江戸期には肝付氏によって信仰されています。武神として麓の武士を中心に崇拝されていました。

南方神社

⑥清凉院跡

寛文 11（1671）年に４代当主肝付兼屋の夫人が死去した際に、その菩提寺として建立されました。現在は千手観音像と招魂碑があり、一般墓地となっています。

清凉院跡の千手観音

⑦善行寺関係

浄土真宗の寺院で、その前身となる寺院は明治 15(1882)年に本堂の建立が行われています。明治 27(1894)年に山口県阿武郡の善行寺を移すことで現在に至ります。この寺院は周辺に廃仏毀釈(はいぶつきしゃく)以前にあったとされる寺院の仁王像などが安置されています。

善行寺の仏像と仁王像

⑧仮屋崎用水路

戦中になる昭和 19(1944)年に食料増産を目的として建造されました。戦時中のために若い働き手がいない中での用水路づくりは大変であったと伝わります。トンネル入口には内部がつまらないように沈殿槽が作られるなど工夫も見られ、現在も使用されています。

仮屋崎用水路

⑨ところてん

原料となるてんぐさは天草産ですが、ところてんを昔から生産する工場があり、喜入のところてんとして定着しています。お土産品としても定番です。

⑩白灰窯跡(へやきがまあと)

地元では「へたっごや」とも呼ばれています。喜入沖にはモクハチアオイと呼ばれる貝が層をなしてあり、それを窯で焼き砕いて漆喰の原料などにしていました。かつては各地域にありましたが、現在では 3 カ所のみとなり、その中でも状態よく保存されているのが大丸集落の窯です。

白灰窯跡(大丸集落)

4.　喜入一倉町　喜入の山間部・知覧との交流地

喜入の中では唯一海岸線を有しない地区です。なだらかな斜面地に集落が広がり、畑作や牧畜が盛んに行われてきました。喜入グリーンファームが整備された周辺では、江戸期に馬の放牧が盛んに行われていた牧があり、近代に入ってからは競馬場も設置されました。その競馬場では、隣接する知覧地域との交流も盛んに行われていました。

①石工集団

かつて一倉集落には石工集団がいたとされていますが詳細は不明です。

②喜入牧

江戸期には肝付家の私営の牧として運営されていました。馬の選定のために年一回、馬追い行事も開催されていました。その際に使用されるオロと呼ばれる土塁が残っています。

苧(まお)跡(グリーンファーム内)

③小田代競馬場跡

大正 5 (1916)年に競馬場が設けられました。春と秋に盛大な競馬が行われ、喜入と知覧の人々の交流の場となっていました。知覧からは山の幸が、喜入からは海の幸が集まり、大変にぎわったとされています。

④製鉄炉跡

現在は喜入グリーンファーム内にあります。江戸後期から明治初期にかけて製鉄が行われており、斜面地に石組が並び送風をするための水路跡もあります。谷間には鉄滓(てっさい)も多数発見されています。砂鉄は喜入の海岸から運び込まれていました。

5.　喜入前之浜町　喜入の産業と交通を支えた町

地名のごとく、浜が連続する海岸線には、この地域の産業の 1 つであった貝灰製造の窯跡が残されています。喜入の南北に細長い海岸線では貝が豊富に採取され、それを加工して漆喰の原料となる貝灰が製造されていました。窯跡は他の地区でも確認できますが、前之浜地区にも残されています。

また、集落の旧道沿いには明治期に架橋された石橋もあり、当時の風景を静かに伝えてくれます。

①白灰窯跡(へやきがまあと)

地元では「へたっごや」とも呼ばれています。かつては各地域にありました。前之浜町には現在でも 2 カ所残っています。

②貝底橋（眼鏡橋）

明治 43(1910)年に鹿児島から山川への街道に架橋されたものです。二重アーチが美しく地元産の凝灰岩が使用されています。昭和 36(1961)年に現在の国道が開通したため、この

貝底橋

橋は旧道となりました。

③水神社

水神として地域によって信仰されています。実際に神社のある場所付近から水が湧出し、隣接する前之浜小学校のプールにも使用されています。

水神社

④チョイノチョイ踊り

前之浜地区では川上集落と川中集落に古くから伝承されていました。近年、小学校の行事として復活し、現在に至ります。元々は加世田の人が前之浜を訪問した際にひそかに伝授させたとされています。男性が女装し、祝いや慶事に踊られています。

6.喜入生見町　湧水の豊富な田園地帯

「生見（ぬくみ）」は知らないとなかなか読めない地名です。この地名は温い水こと湧水の豊富さにあるとされています。海岸部から少し山手に入ると、火砕流堆積物から成る小高い丘陵地があり、その麓からは湧水が確認できます。この豊富な水は、農業用水としても活用され、湧水は夏は冷たく感じますが、温度が一定なため冬場には少し温かく感じることから、「ぬくみ（ぬくい水）」という地名になったとも言われています。また、水田も広がり、田の神も点在しています。

旧石器時代や縄文時代の石器や土器が出土した帖地遺跡のある帖地集落は山間部にあり、山の信仰を伝えてくれる文化財が点在しています。指宿市と接する地区だけに、植生も南にあることを意識させる雰囲気があります。

①いでんこ

生見という地名の由来となったとされる湧水です。集落の背後にある姶良カルデラの噴出物が堆積した丘や台地の麓などから水が豊富に湧出し、細長い池を形成しています。それらが水源となり、周辺の田んぼに水が供給されています。夏場は涼しく「いでんこ」として親しまれています。

いでんこ

②帖地の山の神

山之神または荒神ともいわれ、女神ともされています。巨石が御神体とされ、部落神として信仰されています。

③生見海岸

遠浅の海岸として海水浴客が訪れる生見海岸。駅からも近く、国道沿いでもあり夏になると海水浴客でにぎわいます。長い海岸に沿うように松林が広がり、それが目印です。

④千貫平

指宿スカイラインからは行きやすく、生見集落からは登山コースとして親しまれている千貫平は、喜入のシンボル的存在です。南九州市頴娃との分水嶺でもあり、標高は尾巡山が５７７ｍ、吉見山が５２０ｍあります。山頂付近は高原でつつじやヒサカキなどが群生しています。

千貫平を望む

⑤羽出島神社

米倉神社とも呼ばれ、かつて喜入を領していた村岡家が肥前羽島の出身であることから、その羽島権現を祭ったものとされています。御神体として昔、暴風雨から集落を守ってくれた軽石と石斧が安置されています。

⑥道秀の墓

平家の落人ともされている道秀は怪力無双の人物であったと伝わります。この米倉の祖ともされていて、石塔婆が建立されています。周辺には古石塔が並んでいます。

⑦古殿の板碑

板碑が並ぶ場所は「アンダドンヤシキ」と呼ばれ、現在の所有者が大切に信仰してきました。板碑の高さは 118cm あり、背が高く、その周辺に五輪塔などの古石塔が立ち並びます。

古殿の板碑

⑧海岸の塩田

詳細な記録は残されていませんが、生見地区の遠浅の海岸部では、かつて塩造りが盛んに行われていたとされています。

各地に点在する田の神

平坦地の少ない喜入地区ですが、河川周辺には田園が広がっています。また台地上でも用水路が構築されて田んぼが広がる集落もあります。そのため各地に田の神が建立されており、旧麓や生見、帖地、古殿、田貫にあります。北部は少ないです。

生見の田の神

古殿の田の神

帖地の田の神

鈴の田の神

【喜入地域の主な未指定文化財リスト】

1．喜入瀬々串町	
1	宮崎神社（茶屋跡）
2	番所跡
3	瀬々串浦（木入津）
4	瀬々串のそば
2．喜入中名町	
5	中名鉱山跡
6	砂鉄採掘
7	喜入石油基地のある風景
8	枦馬場
9	献穀田
１０	あおさ　あおのり
１１	長野館跡（肝付家の別荘）
１２	十五夜行事
１３	六月灯の灯籠
１４	方言（枕崎弁のルーツ）
１５	ドンジ節

３．喜入町	
１６	喜入麓
１７	旧麓
１８	旧市
１９	宮坂神社
２０	南方神社
２１	清凉院跡
２２	善行寺に伝わる遺物
２３	仮屋崎用水路
２４	ところてん
２５	白灰窯跡
４．喜入一倉町	
２６	石工集団
２７	喜入牧跡
２８	小田代競馬場跡
２９	製鉄炉跡
５．喜入前之浜町	
３０	白灰窯跡
３１	貝底橋
３２	水神社
３３	チョイノチョイ踊り
6．喜入生見町	
３４	いでんこ
３５	帖地の山の神
３６	生見海岸
３７	千貫平
３８	羽出島神社
３９	道秀の墓
４０	古殿の板碑
４１	塩田跡
４２	各地の田の神